

委託事業実施内容報告書
平成27年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】
実施内容報告書

受託団体名 （株）きぼう国際外語学院

1. 事業名称

・外国人、日本人への「やさしい日本語」の普及と「やさしい日本語」による日本語教育体制整備

2. 事業の目的

・本事業は、「やさしい日本語」を栃木県内在住の日本人および外国人へと普及することを通して、栃木県内在住の日本人と外国人の相互理解、および、在住外国人の地域社会への参加を支援することを目的としている。
「やさしい日本語」とは、多文化共生社会における地域の共通語であり、また、地域型日本語教室の初級レベルである。在住外国人が地域社会に参加するためには最低限度の日本語力が必要であるが、同時に、日本人側がそれに合わせた日本語を使用するなど、「やさしい日本語」や在住外国人への理解が不可欠である。この「やさしい日本語」を在住外国人および日本人に普及させることは、相互理解、および、在住外国人の地域社会への参加へとつながると考えられる。
このため、在住外国人と関係する各機関、国際交流協会等の団体はもとより、それ以外の関係各団体、企業などとも連携し、外国人の地域社会への参加支援、および、日本人の在住外国人理解を促進させるべく、「やさしい日本語」を普及させ、栃木県内の外国人への日本語教育体制を整備する。

3. 事業内容の概要

●取組1:日本人対象「やさしい日本語」の基礎講座
《目的:「やさしい日本語」の使い手を増やし、外国人への理解を広げ、外国人の社会参加を促す》
宇都宮市職員向け「やさしい日本語講座」を、宇都宮市国際交流プラザ(宇都宮市)と協働で開催する。窓口担当者と在住外国人とが実際に意見交換ができる講座を設ける。看護学校の生徒を対象にも「やさしい日本語講座」を開催し、今後看護師として外国人に接する若者に「やさしい日本語」を学んでもらう。また、栃木県医療社会事業協議会と協働で講座を開催する。ソーシャルワーカーの方を対象としている。講座では「やさしい日本語」とは何か、「やさしい日本語」の作り方などを知ってもらう。講座には在住外国人にも参加してもらい、実際の交流を通して、「やさしい日本語」の実践だけではなく、在住外国人と接することで相互理解を深める。

●取組2:ボランティア団体と外国人ボランティアのマッチング検討会議
《目的:在住外国人の地域社会への参加、および、日本人の在住外国人への理解を促す》
地域ボランティアを募集している団体に在住外国人が参加するための支援ができるか検討会議を行う。
とちぎNPOボランティアセンターに登録している団体の中で在住外国人を積極的に受け入れている団体は多くない。しかし、こうした団体や活動に参加したいと考えている在住外国人は少なくない。そこで、ボランティア募集をしている団体と、ボランティアに参加希望の在住外国人のマッチングができるか、そのボランティア団体代表者などと検討会議を行う。これまで在住外国人との接触が少なかったボランティア団体およびその参加日本人の在住外国人理解へとつながると同時に、在住外国人ボランティアを紹介することで、彼らの興味のある分野で日本人とともに活動することができ、日本語の向上も期待できる。

●取組3:外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信
《目的:在住外国人との関わりが少ない日本人の外国人理解の促進、在住外国人の社会参加》
栃木県全域で放送されており、リスナーも多いFMラジオで、「やさしい日本語」および在住外国人に関する番組を作成し、放送する。ラジオ番組を通し、在住外国人との直接の関わりが少ない日本人にも、気軽かつ簡単に「やさしい日本語」および在住外国人に触れてもらうことができる。また、番組作成に在住外国人に参加してもらうことで、彼らが地域社会に参加し、自身の声を伝えることができる。

●取組4:テーマ別日本語教室
《目的:在住外国人の日本語学習支援、日本人の在住外国人理解、双方への「やさしい日本語」普及》
外国人が選んだテーマに沿ってシリーズで学習できる日本語教室を開催する。最終日にはそのテーマ分野の専門家やそのテーマに興味のある地域の日本人に参加してもらい、共通のテーマを共に学ぶことで相互の理解を深める。在住外国人にとっては、自分の興味について話すための最低限の日本語を学ぶ場となる。また、日本人にとっては、「やさしい日本語」を使う実践的な場となる。

4. 事業の実施体制について

地域の大学、外国人派遣機関、地元企業など、今まで連携してきた団体のほか、新たに連携ができたボランティアセンター、別地域の国際交流協会とも協力体制をとった。その他、公共機関との連携を強化（広報協力及び研修依頼、会議参加、外国人窓口での団体紹介による外国人の繋ぎなど）、26年度にセミナーを共催した宇都宮市とは、今年度も「やさしい日本語」講座を共催し、さらなる連携をとった。そして、公的機関に、日本語教育の重要性、日本語教師の存在を知ってもらい、地域の国際化に不可欠な存在であることを認知してもらうことができた。連携は、団体同士だけではなく、在住外国人との各団体の連携、外国人同士、外国人と地域日本人との連携も促し、外国人の社会参加を図っていく。ボランティアセンターを通し、NPOのみならず、大学、県立高校、自治体との連携を取れるよう協力体制を整備した。

また、FM栃木との連携は、FM栃木が持つネットワークとつながることができ、栃木県内の各市町、栃木県内企業、近隣の公共機関団体、企業などと外国人、または、日本語教育関係機関が連携できる可能性の拡大となった。在住外国人とそれらの機関が知り合うことは、それらの機関と各国際交流協会、留学生が所属する大学、所属している派遣機関へと連携を広げることができる。

外国人に関係があるという団体だけではなく、一見外国人とは関係のないような機関がこの取組に参加できるようにした。特に、公共団体(宇都宮市、栃木県医療社会事業協会など)とのセミナーの共催などを行い、連携を強化した。

コーディネーターはこういった連携全体をコーディネートした。中核メンバーはその担当取組の中で、連携先各所への概要説明、およびコーディネーターへの紹介等を行った。大きなつなぎ役として、コーディネーター、細かいつなぎ役を中核メンバーが担った。

5. 運営委員会の開催について

【運営委員】

1	結城 史隆	白鷗大学
2	根本 愛子	国際基督教大学
3	行本 リジア	鹿沼市国際交流協会
4	坂本 文子	うつのみや市政研究センター
5	小林 有見子	とちぎNPOボランティアセンター
6	本多 辰子 エリザ	栃木県国際交流協会
7	神山 英子	日本大学
8	横塚 恭宏	とちぎNPOボランティアセンター
9		
10		

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成27年5月9日 (土) 16:00~18:00	2.5時間	きぼう国際外語学院	結城史隆、本多エリザ、行本リジア、坂本文子、根本愛子	1. 事業内容確認 2. 新たな連携先の可能性の検討 3. 参加者の募集方法について 4. 各取組への意見等
2	平成27年10月27日(火)18:30~21:00	2.5時間	きぼう国際外語学院	結城史隆、行本リジア、坂本文子、横塚恭宏、神山英子	1. 事業経過報告 2. 事業の改善点 3. 連携先の検討 4. 川柳募集のための方法等 5. 教室参加者の募集方法
3	平成28年3月15日(火)18:30~21:00	2.5時間	きぼう国際外語学院	結城史隆、坂本文子、横塚恭宏	1. 事業報告 2. 連携先の報告、感想 3. 事業全体の反省、課題 4. 来年度へ向けての改善点

6. 取組についての報告

取組1：日本人対象「やさしい日本語」基礎講座

(1) 体制整備に向けた取組の目標

地域にて、外国人が社会参加していくには、外国人の日本語習得のみならず、受け入れ側である日本人の外国人理解、コミュニケーション術が必要である。日本人が地域住民である外国人の母語を習得するには無理があるが、「やさしい日本語」であれば習得可能であり、どんな外国人とも交流ができる。そういった、一定の配慮が必要な外国人とのコミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」を地域に広めること、またそれを学ぶことにより、外国人理解を進めることを目標とする。

また、講師として参加した外国人も、「やさしい日本語」の普及が自分たちの生活にも役立つことがわかり、日本語学習へのきっかけとなる。「日本に在住する外国人も最低限の日本語を覚えよう」と考え、家族や友人へ日本語学習の重要性を訴えるようになる。

日本語教師が講師をすることで、地域での国際化、多文化共生に、必要な人材であることを、講座に参加した公的機関に認知してもらう。

(2) 取組内容

今後「やさしい日本語」が必要だと思われる分野で、「やさしい日本語講座」を開催した。実際に外国人と会話をし、「どうしたら通じるのか」「どうして通じないか」を体験し、自分自身の「日本語」に関心を持ってもらい、その後、講師が「やさしい日本語」の基礎知識、使い方などを講義した。

取組の評価は、受講者へのアンケートを基に、評価委員による評価会議で行い、運営委員会に報告した。

(3) 対象者

受講者：各団体に所属している日本人（看護学校、市職員、福祉関係など）
講師：外国人講師（日常会話の日本語がわかる人）

(4) 参加者の総数 93 人（延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。）

そのうちの日本語学習者数 10 人

【出身・国籍別内訳】

中国	2人	インドネシア	1人	・カンボジア 1人 ・ ・
韓国	人	タイ	1人	
ブラジル	2人	ペルー	人	
ベトナム	2人	フィリピン	1人	
ネパール	人	日本	83人	

(5) 開催時間数(回数) 6 時間 (全 3 回)

(6) 活動の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年6月30日 (火) 10:00～12:00	2	宇都宮市中央生涯学習センター	25人	やさしい日本語基礎講座	昨年に続く、レベルアップ講座として開催。やさしい日本語の概要と、やさしい日本語の実践。	根本 愛子	永池リュウ、 王広法、洪聖傑、アエブサエブディン、行本リジア
2	平成27年9月5日 (土) 10:00～12:00	2	済生会病院会議室	18人	やさしい日本語基礎講座	医療ソーシャルワーカーに向けたやさしい日本語入門講座。外国人を交え、やさしい日本語の実践を行ったり、外国人から日本の病院等での経験等を話してもらった。	栗又由利子	永池リュウ、 アエブサエブディン、行本リジア、 石川ヴィルジリー、ルンナバー ジャイサウエン
3	平成27年11月10日 (火) 9:00～12:00	3	報徳看護専門学校	40人	やさしい日本語基礎講座	看護専門学校の学生に、今後現場で遭遇する外国人患者への対応方法を学習してもらった。「やさしい日本語」の使い方、コミュニケーションの方法を学んでもらった。	栗又由利子	グエン クイン チャウ、 石川 ヴィルジリー、 近藤ボア、 行本リジア

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【第1回 27年6月30日】

宇都宮市役所職員向け「やさしい日本語講座」を開催。昨年に引き続き、第2回目となった。

宇都宮市と共催という形で行った。募集は、宇都宮市の全庁メールにて、担当である国際交流プラザ(宇都宮市の国際課担当窓口)が募集した。希望者対象ではあるが、参加義務が一般的な希望者のみのセミナーなどよりも強い参加を促す募集の仕方であった。

当日の参加者は、25名であった。窓口担当者のみではなく、窓口などを担当したことがない、または、外国人対応の必要がない職員も参加していた。

事前に、「窓口対応で困ったことはあるか」というアンケートを職員にとってもらった。また、宇都宮市在住外国人にも宇都宮市国際交流協会を通し、「市役所の対応で感じたこと」というアンケートをとってもらった。

アンケートからわかったことは、市の職員は、「日本語」の問題だけではなく、「異文化理解」または、「外国人との接し方」においてのほうが、対応に困っているようだと感じた。一方、外国人側は、「日本語教室に通う外国人＝日本語がまだ上手ではない外国人」のため、通常、通訳が出来る友人などと一緒に訪庁しているので、市役所の対応に対し、感じていることはあまりないようであった。

こういった事情をふまえ、講義内容を考え、「やさしい日本語が必要な理由」、「やさしい日本語への言い換えのポイント」「在住外国人から実際の声を聞く」などを内容で講義を行った。市からは、2年目の試みのため、発展的内容での講義が要求されていた。

発展的内容ということで、昨年行った講座の内容は行わず、もう少し理論的な講義を行ったが、実際の参加者は、全員が初めての参加者であるため、内容が難しく感じたようであった。これについては、担当の市の部署とのやりとりなのかもしれないが、市としては、「昨年と同じものではなく、発展的なものであること」ということが、すでに決まっていることであり、年度の計画などの関係から内容を変えることは難しいのではないかと考えられた。しかしながら、参加者は初めての参加者ばかりで、昨年度の内容も知らない状態で参加をしていた。このことがわかったのは、講義が始まってからであり、この部分については、しっかり打ち合わせができていなかった。しかし、もし打ち合わせをしても、市の方針が決まっている以上、発展的内容であることは変えがたい。こういった場合に、どう対応するか、今後の課題となった。これについては、日本語教育学会実践フォーラムのポスター発表にて、まとめ、発表をしている。

外国人住民に実際に講義の中で、日本語がわからない住民を演じてもらい、「やさしい日本語」を引き出すことも実践的に行った。これについては、おおむね好評であった。その後、グループで市役所について、職員と外国人で意見交換をした。時間が短くなってしまい、残念だったという意見があった。こういった当事者の声を聞く機会はなかなか得ることはできないと思うので、今後もこういった機会を、講義という形だけでなく、意見交換会のようなイベントとしてできるよう、市、国際交流協会、当校が協力できればと感じた。



活動例②

【第2回 27年9月5日】

栃木県医療社会事業協会と連携し、医療ソーシャルワーカー向け「やさしい日本語」講座を行った。受講者の募集は、栃木県医療社会事業協会が行った。対象は医療福祉機関または精神保健分野で働く精神科ソーシャルワーカーとし、医社協および栃木県精神保健福祉社会に参加募集を呼びかけた。

医社協は、前年度より「患者・患者家族・当事者の声を聞く」ということをテーマに研修会を開催していた。そこでこの「患者・当事者」を、今回は在住外国人とした研修を行うこととなった。ワークショップでは多文化的背景を持ったクライアントの支援を在住外国人と共に考えることとした。特にワークショップについては医社協との打ち合わせの上で、①通院に関する不安要素(通院経験の有無に関わらず)、②慢性疾患などがある場合、通院や外国で治療を継続する不安要素、③言語的・宗教的配慮などを含めソーシャルワーカーに期待すること、④医療福祉に限らず「日本で生活すること」、⑤自国の医療事情、⑥死生観や宗教観、に焦点を当てることとなった。

研修は参加者の都合を考慮し、栃木県宇都宮市内の病院内で行った。当日は病院勤務のソーシャルワーカー13名、介護施設や保健所勤務のソーシャルワーカー5名、合計18名の参加があった。また、ワークショップに協力した在住外国人はインドネシア、フィリピン、タイ、ベトナム、ブラジル出身の5名であった。

研修は次の手順で行った。

①(講義)栃木県内の在住外国人

②(WS)外国人と話してみよう

③(講義)「やさしい日本語」とは

④(WS)外国人にきいてみよう

⑤まとめ

研修は、栃木県内の在住外国人の概要が説明されたあと、まず参加者に在住外国人と話してもらう時間を設け、「外国の方は、なにかを相談にきました。その相談事がなにか、聞き出さない。名前、国籍、年齢、家族構成などはもちろん必要事項です。それらも合わせて聞き出さない」というタスクを遂行してもらった。その際、在住外国人は「日本語があまりできない」という設定となっている。その後、「やさしい日本語」の概念、具体的な作成方法を提示したうえで、再度在住外国人から上記6点を中心としたテーマで話をしてもらった。

参加者にはアンケートへの回答を依頼した(回収数17名)。その結果を以下にまとめる。

まず、研修内容については全員が「よく理解できた」と回答し、実際に在住外国人と日本語を使って話ができたとへの評価が集まった。

まず、「やさしい日本語」に関する講義では、「言葉を易しくしたり、言い換えてみるなどとても勉強になった」「通訳に頼らず自分でも工夫していきたい」との声があり、言語的配慮につながる意見が出た。さらに、「『やさしい日本語』に外国人への配慮が感じられる」「違う視点で外国人の方への対応を考えることができるようになった」との声もあり、文化的配慮への気づきにもつながったといえよう。

また、今後の業務に参考となるか否かについては、15名が「とても参考になる」、2名が「まあまあ参考になる」と回答した。後者は「多文化支援が必要となるクライアントが少ないのでまだ実感がない」ことが理由としてあげられた。ここから、研修参加者に「やさしい日本語」講座の必要性を感じてもらえるかどうかは、これまでの外国人との接触経験や「やさしい日本語」が必要な機会の有無が影響しているといえる。

予想していなかった感想も出た。講師補助として参加した在住外国人から、「こういった機会を与えてくれてありがとう。本当に感謝している」という感想であった。在住年数が長い外国人住民でも、自分の言葉で、自分の感じたことを話す、話していい場面は少ないということであった。どこで、誰に向かって話すのかなど、そういった機会がないと話していた。

上級と思われる外国人住民でも、こういった自分のことを話す機会が与えられることは、外国人の地域でのパワーになり、また、日本語学習へのモチベーションとなると感じた。



(8) 目標の達成状況・成果

普段外国人とあまり接触のない日本人にとって、研修などで説明を聞くよりも、実際の外国人と直接会話し、意見交換することが日本人側の意識改革に役に立つことがわかった。イメージしていた外国人と、実際に話してみた外国人とが違ふことは、「外国人」という大きな枠組みで考えていた日本人側に、多様性の考え方をもたらすことになった。外国人＝日本語がわからない、外国人＝英語、外国人＝欧米人など、普段外国人と接触のない日本人の多くが持っている。そういった日本人に、在住外国人の多様性を伝えられた。アンケートにおいても、外国人の考えが聞けてよかった、「やさしい日本語」を知りコミュニケーションのポイントがわかったという意見があった。講座の効果は非常に高いと言える。また、外国人側には、講座で講師役として参加し、非常にためになった、自分の日本語力不足を感じた、また日本語学習をしてみたいという声があった。その他、「人の役に立つ」ということに、非常に満足感を持っているようであった。自分の経験や、自分の日本語での話が、誰かの役に立っているということに喜びを感じたようである。こういった、たくさんの経験を今まで話す機会、場所もなく、人の役には立たないと思っていたが、本当にこういった機会を与えてくれてありがたい、感謝しているという言葉が、参加した外国人全員から聞くことができた。これは、日本語をどんな目的で学習するのかというモチベーションにもつながると思われる。外国人側にも大きな効果があった。

(9) 今後の改善点について

現場においては「外国人への配慮」「外国人とのコミュニケーション」の必要性が認識されているものの、いかに対応すべきかが模索されており、今後は関係各分野との連携がこれまでに重要となってくるだろう。その際、これまで接触経験のない人々に、「やさしい日本語」の必要性をいかにイメージしてもらうかが課題となるだろう。今後も同様の実践を続けていく中で、より効果の高い実践方法を模索していきたい。また、事前事後のアンケート調査やワークショップ時の発言などの記録などを用いることで、具体的にどのような部分で意識の変化が起こるか、また、言語行動にどのような影響があるかを調査していきたい。

取組2: ボランティア団体と外国人ボランティアのマッチング検討会議

(1) 体制整備に向けた取組の目標

・本取組が主な対象とする栃木県在住外国人は、20代から40代の比較的若い層の割合が高く、かれらの居住は長期化・定着化してきている。震災以降減少を続けていた在住外国人人口は増加に転じており、今後も増加が見込まれる。その裏で、県内各所の地域コミュニティでは、少子化と高齢化を伴う人口減少が進んでおり、地域コミュニティの維持が喫緊の課題となっている。在住外国人は地域コミュニティの活力となる可能性を秘める。だが、在住外国人が地域と接する場面は未だ非常に少ない。
過去4年間の取り組みを通じて、地域社会との接点を求めたり、ボランティア活動を希望する在住外国人は少なくないことがわかってきた。しかし、かれらはどこへどのように相談し行動すればよいのかわからない場合がほとんどである。他方で、市民の地域参加・参画を支援するまちづくり組織等はこれまで在住外国人の利用を想定してこなかった。そして、在住外国人支援を行う国際交流協会等は在住外国人の地域参加・参画に対する支援を一層充実させる必要があることがわかってきた。つまり、地域参加に関して、在住外国人と日本人住民が「交差する場」が不足しているだけでなく、それをコーディネートできる体制が必要となっている。
そこで、これまで日本人を主な対象としてきたまちづくり組織等を在住外国人も利用しやすい環境にすること、同時に、これまで在住外国人を主な対象としてきた国際交流協会等を日本人も利用しやすい環境にすることを目標とする。その際、「やさしい日本語」を活用し、双方の連携強化と在住外国人の利用促進を図る。これは、在住外国人への「やさしい日本語」の普及を進めるための素地をつくる取組である。在住外国人にとっては、こういった活動が、「やさしい日本語」を知り、日本語学習への意欲のきっかけになると考えられる。

(2) 取組内容

・これまで日本人を主な対象としてきた機関として「とちぎNPOボランティアセンターぽ・ぽ・ら」、「宇都宮市まちづくりセンターまちぴあ」、在住外国人を主な対象としてきた機関として「栃木県国際交流協会」、「鹿沼市国際交流協会」に参加を呼びかけた。さらにコミュニティ・ケアの取組を進める「宇都宮市社会福祉協議会」、地域コミュニティの維持に対する政策的検討を進める「うつのみや市政研究センター」、ボランティア活動を希望する学生にも参加をお願いした。在住外国人の地域社会への参加へ向けた一体的多体制整備をめぐり、このように多様な主体からなるプラットフォームの形成は県内で初めての試みである。
ただし、参加者の「やさしい日本語」に対する知識や、在住外国人の現状に対する認識にはばらつきがあった。そのため、「やさしい日本語」を活用した在住外国人の地域参加促進のための体制整備を念頭におきながら、まずは、それぞれの経験や問題であると思うことについて意見交換を行い、共通認識を図ることを重視し、2回の検討会議を行った。

(4) 参加者の総数 11 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 3 人

【出身・国籍別内訳】

中国	人	インドネシア	人	
韓国	人	タイ	人	
ブラジル	2人	ペルー	人	
ベトナム	1人	フィリピン	人	
ネパール	人	日本	人	

(5) 開催時間数(回数) 5 時間 (全2回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年11月24日 (火) 19:00～21:30	2.5	とちぎNPOボランティアセンター ぽぼら	10人	外国人住民と日本人 住民の交差点について	それぞれの団体の活動内容と、外国人住民との接点等を紹介 団体の課題等の発表		
2	平成28年2月16日 (火) 19:00～21:30	2.5	とちぎNPOボランティアセンター ぽぼら	8人	外国人住民と日本人 住民の交差点の創 出について	それぞれの団体の活動内容の中に、外国人住民が参加できるものはあるか、また、なぜ参加できていないのかを検討		

(8) 目標の達成状況・成果

「ぽ・ぼ・ら」や「まちびあ」へも在住外国人住民からの問い合わせはあるが非常に少ないこと、実際に在住外国人が参加した例では活動に広がりが見えたこと、「やさしい日本語」を取り入れることで在住外国人が参加できる活動も少なくなることなどが報告された。そして、国際交流協会は一定の取組の蓄積はあるが、その情報が「ぽ・ぼ・ら」や「まちびあ」と共有されることはなく取組が広がっていかないことなどが報告された。さらに、日本人住民と在住外国人の〈交差する場〉を関係機関が一体となり構築するには、「やさしい日本語」の普及が利用者層の幅を広げたり、日本人住民の多文化共生理解を促すなどの効果が期待できることもわかってきた。

(9) 今後の改善点について

今後は、「やさしい日本語」に対する認識を参加者全員が深めていくこと、同時に、その活用方法を具体的な取組につなげるためのさらなる研究と検討が必要であることが課題として残った。
各団体により、外国人住民に関しての知識の相違があり、地域で外国人支援のための体制を作るまでには、地域在住外国人についての学習が、それぞれの団体、日本人側に必要であると思われる。
在住外国人の声の更に聞くことができるように、会議への外国人参加者を増やし、当事者の声を更に聞いていきたい。日本人側には外国人への理解を更にひろげること、外国人側には理解をしてもらうために声にすること、そのための日本語を習得することなども課題だと考えられる。

取組3: 外国人出演による多文化共生ラジオ番組作成と発信

(1) 体制整備に向けた取組の目標

・各国際交流協会の日本語教室、公的機関の外国人窓口にも募集チラシを置いてもらい川柳を募集する。受身の参加ではなく、積極的参加になると考えられ、当校と各国際交流協会、FMとちぎと各国際交流協会、FMとちぎと外国人が連携することができる。また、外国人とFMリスナーがつながることができ、外国人の社会参加に欠かせない「外国人理解」を促進することができる。リスナーには、番組を通し日本語教師の存在を知ってもらい、外国人と日本人の橋渡しの存在としての日本語教師、そして、「日本語教育」という分野と、その専門家が存在することを、不特定多数の日本人に理解してもらう。

(2) 取組内容

・各国際交流協会に呼びかけ、外国人に自分の日本での経験を、川柳として詠んでもらい、集まった中から優秀作品を選び、その川柳を詠んだ外国人に、ラジオ出演をしてもらう。1週間に1回3分間のラジオ番組内で、その句を詠んだ背景や、今の生活などを語ってもらい、FMのリスナーに楽しく、在住外国人について知ってもらう。優秀作品は毎週1名選出する。月間優秀賞などを、フェイスブックなどを使い決定する。そうすることで、より番組を広く知ってもらうことができる。

ラジオ番組内で日本語教師は、外国人の話を「やさしい日本語」で聞き出し、聴取者にわかりやすいよう説明を加える。また、日本語教師は、ラジオ出演者の外国人へ、事前に川柳説明の日本語の修正、ラジオ番組内での発音の指導などを行う。

①事前打ち合わせ(コーディネーターとラジオ担当者)
②外国人発表者への日本語指導(1時間)
③リハーサル・本番・ふりかえり
④次回の計画及び反省・広報・報告

各国際交流協会の日本語教室ボランティアには、川柳作成の補助をしてもらう。

取組の評価は、外部の放送専門家や、青年会議所の方などの一般の方、在住外国人で構成される評価委員による評価会議で行い、結果を運営委員会に報告する。

(3) 対象者

・ラジオ番組聴取者
川柳作成は在住外国人に限る。

(4) 参加者の総数 27 人(延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 27 人

【出身・国籍別内訳】

中国	7人	インドネシア	1人	
韓国	人	タイ	人	・ナイジェリア 1人
ブラジル	人	ペルー	1人	・インド 1人
ベトナム	12人	フィリピン	2人	・
ネパール	2人	日本	人	

(5) 開催時間数(回数) 27 時間 (全 9 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年6月14日(日) 12:00~17:00	5	レディオベリー	5人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	グエン ヴィエット・チン/ DAO THI THUY DUONG/ HOAN DUO TRUNG/グエン フオ・トク・ダオ/グエン ティ・クイントー
2	平成27年7月22日(水) 18:00~22:00	4	レディオベリー	4人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	エンリケ エロイ/ア ディカリ・ハトラ・スミ ラ/Violet Offeren/ KRISHNA KHARAL
3	平成27年8月9日(日) 13:00~16:00	3	レディオベリー	3人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	ホー・ティー・チュウ クリー/グエン ティ・ガー/グエン ゴック・ホアイトウ オン
4	平成27年9月7日(月) 18:00~20:00	2	レディオベリー	2人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	Soni Jagwani/ 顔 茜
5	平成27年9月23日(水) 13:00~16:00	3	レディオベリー	3人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	ホアン・ティトゥー フエン・ファン・ヴァ ントアン/フアム・ チ・タン・チュック
6	平成27年10月1日(木) 18:00~19:00	1	レディオベリー	1人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	アエブ サ エブディン
7	平成27年10月4日(日) 13:00~18:00	5	レディオベリー	5人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	賈 艶秋/趙 楽 美/姚 涵/チン トウ・スアン/倪 麗莉
8	平成27年11月6日(金) 18:00~20:00	2	レディオベリー	2人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	李 旭東/ 夏 輝
9	平成27年12月5日(土) 13:00~15:00	2	レディオベリー	2人	ラジオ収録	外国人川柳の収録を通し、日本語のアクセントやイントネーション、有効なフィラーの入れ方等を指導。	栗又由利子	タラビス マリア/ イスレタ マーク クリスチャン

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【第2回 27年7月22日】

鹿沼市日本語ボランティア教室にて、ボランティア講師と一緒に川柳を作成する。
この際、日本語ボランティアは、「教える」というのではなく、「聞き出す」ということに力を入れる。
日本語で自分の言いたいことを伝えようと外国人側は必死に日本語を駆使する。日本人側は、言いたいことを理解し、川柳の形にするために、質問を繰り返したり、外国人の話に耳を傾ける。
その後、教室で選ばれた川柳を、きぼう国際外語学院に送る。きぼう国際外語学院では、その川柳をもとに、当事者とやりとりをしながら、放送内容を検討し、台本を作成する。ラジオ局との日程調整をし、収録する。
収録前は、発音、アクセント、イントネーションなどの練習を行い、ラジオを聴いている日本人が理解できる日本語を練習する。その際、ラジオ局の担当者も入り、内容を吟味しながら、収録の準備を行う。
この回に収録した内容は、
「にほんじん おんせんでパンツ はいてない」(ペルー)
「おなりばし さびしいけれど いいところ」(ネパール)
「なっとうを たべてびっくり くさってる」(ネパール)
「またゆれた にほんのじしん おそろしい」(ナイジェリア)



活動例②

【第4回 27年9月7日】

鹿沼市日本語ボランティア教室にて、ボランティア講師と一緒に川柳を作成する。
この際、日本語ボランティアは、「教える」というのではなく、「聞き出す」ということに力を入れる。
日本語で自分の言いたいことを伝えようと外国人側は必死に日本語を駆使する。日本人側は、言いたいことを理解し、川柳の形にするために、質問を繰り返したり、外国人の話に耳を傾ける。
その後、教室で選ばれた川柳を、きぼう国際外語学院に送る。きぼう国際外語学院では、その川柳をもとに、当事者とやりとりをしながら、放送内容を検討し、台本を作成する。ラジオ局との日程調整をし、収録する。
収録前は、発音、アクセント、イントネーションなどの練習を行い、ラジオを聴いている日本人が理解できる日本語を練習する。その際、ラジオ局の担当者も入り、内容を吟味しながら、収録の準備を行う。
この回に収録した内容は、
「あじさいは いろとりどりで きれいだな」(インド)
「にほんじん あたまがかたい だんなさま」(中国)



(8) 目標の達成状況・成果

評価会議にて、成果の検証を行った。放送時間帯のレディオベリーのリスナーは18万人だが、リスナーからの直接の反応を得るのは難しい。しかし、評価委員がクライアントとの会話の中で、番組について言及されることもあった。そこで特徴的なのが、「車に乗っていたら偶然流れてきて、聞いた。なるほどと思ったし、おもしろかった」という感想が得られたことである。ラジオ放送は、特定の人が聴いている場合もあるが、ほとんどが車などの中で「聞き流し」ている。そういった状況の中、外国人の川柳が流れ、外国人の発話を聞き、外国人の考えを聞くことは、不特定多数の人に外国人の存在を知らしめることになる。また、外国人から話を聞きだす「日本語教師」の存在は、外国人と全く接点がない住民にとって、新しい発見となった。
広域で不特定多数の人に、外国人の存在を知ってもらうことは、受け入れ側である日本人の意識改革であり、日本人側の受け入れ態勢が整うことは、外国人が日本語を学習するモチベーションの維持にもつながる。
取組の発展としては、鹿沼市国際交流協会が鹿沼市インターナショナルフェスティバルにて、川柳を自分で筆書きし、掲示するという試みを行った。地域住民がその川柳を読みながら微笑んでいた。また、毎月発行している国際交流協会の広報に、2句ずつ掲載し、その内容等を解説している。川柳を放送するだけにとどまらず、地域住民へとつながっていったことは、地域の外国人理解を後押ししたと考えられる。

(9) 今後の改善点について

川柳の募集の仕方が課題となった。今回は、鹿沼市国際交流協会が全面的に協力してくれたおかげで、番組を作ることができた。県内、他の国際交流協会に呼びかけたが、「カリキュラムにないことは難しい」「学習者には難しいと思う」「学習者の時間がもったいない」などの理由から、参加をしてもらえなかった。直接説明にも行ったが、理解してもらうまでには至らなかった。こちらの説明不足もあるが、長年同じ形で続けてきているボランティアに、効果がある指導法だとしても、受け入れてもらうには時間と労力が必要であると感じた。県内のボランティアに理解してもらうための方法を探っていく必要があると思う。

取組4：テーマ別日本語教室

(1) 体制整備に向けた取組の目標

・日本語を自分の好きな分野から学習し、日本語を習得する。より身近な、知りたい日本語を学ぶ。同じテーマで日本人や、専門家と交流をし、より日本語使用を広げ、また人間関係も広げることを目標とする。

(2) 取組内容

・外国人住民によるテーマ選定会議を開催し、地域で暮らす外国人住民のニーズを把握し、学びたい「テーマ」を決めた。そのテーマについて、興味のある外国人住民を集め、日本語教室を開催し、最終日には日本人との交流、専門家の話を聞くなどのイベントを開催した。選定されたテーマによっては、教室外にも出かけるなど、柔軟に対応した。テーマが、取組2の「地域のボランティア団体の活動」に関連するものであれば、取組2への参加に向けた事前教育としても活用した。外国人主体で行うもの、日本人との交流を主とするもの、テーマに応じた地域の専門家の講座など多様な参加スタイルにて開催した。本取組を通じて集まった外国人住民に対して、各取組への参加を促し、今後の日本語学習の動機づけも高めることができた。取組の評価、日本語教育専門家などの外部有識者などの評価委員による評価会議で行い、運営委員会に報告した。

(3) 対象者

日本語が少しわかる外国人
わからない場合は、できればわかる人と一緒に参加する

(4) 参加者の総数 168 人 (延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

そのうちの日本語学習者数 42 人

【出身・国籍別内訳】

中国	9人	インドネシア	2人		
韓国	人	タイ	11人	・カンボジア 1人	・コンゴ 1人
ブラジル	3人	ペルー	5人	・イギリス 1人	
ベトナム	4人	フィリピン	3人	・アメリカ 1人	
ネパール	人	日本	126人	・パキスタン 1人	

(5) 開催時間数(回数) 75 時間 (全 22 回)

(6) 取組の具体的内容

回数	開催日時	時間数	場所	参加者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成27年5月17日 (日) 10:00～12:00	2	小山城南市民交流センター	5人	ファッションショー	第1回ファッションショー練習。結城紬の歴史的背景を学び、自分の着たい服装の色、形、イメージ等を日本語化する。	日吉達也	
2	平成27年5月21日 (木) 18:00～20:00	2	小山城南市民交流センター	5人	ファッションショー	第2回ファッションショー練習。体の部位やその動かし方、表情に関する日本語を学び、ステージ上での指示に応える。	日吉達也	
3	平成27年5月23日 (土) 10:00～12:00	2	小山城南市民交流センター	5人	ファッションショー	第3回ファッションショー練習。ショー全体のテーマを把握し、理解度や納得度合いの不足をどのように伝えるかを学ぶ。	矢野順	
4	平成27年5月24日 (日) 10:00～14:00	4	小山市城東公園	17人	ファッションショー	ファッションショー当日。イベントの事前準備や後片付けに至るまでのプロセスを知り、主催者側の動きを観察する。	日吉達也	
5	平成27年6月10日 (水) 18:00～20:00	2	白鷗大学	14人	バスツアー(日本人主導)	第1回企画会議。ツアー日時等の決定に至るまで、やさしい日本語を介し日本人との意思疎通を図るよう努める。	矢野順	
6	平成27年6月18日 (木) 18:00～20:00	2	白鷗大学	12人	バスツアー	第2回企画会議。具体的な訪問先の決定に至るに必要な、近隣の名所や料理などの知識を学ぶ。	矢野順	
7	平成27年6月24日 (水) 18:00～20:00	2	白鷗大学	14人	バスツアー	第3回企画会議。確実に理解できているか否かを伝えるための日本語を駆使し、企画内容の確認作業をする。	矢野順	

8	平成27年7月5日 (日) 9:00～17:00	8	栃木市	25人	バスツアー	バスツアー当日。訪問先での案内を聞きながら歴史等を学び、分からない点は積極的に質問する。	矢野順	
9	平成27年7月19日 (日) 10:00～13:00	3	きぼう国際外語学院	10人	着付け(浴衣)	着物にまつわる文化的背景や着付けに必要な知識を、やさしい日本語を介し学ぶ。	日吉達也	福田悟子 武浩美
10	平成27年10月25日 (日) 10:00～12:00	2	きぼう国際外語学院	8人	着付け(浴衣)	着物にまつわる文化的背景や着付けに必要な知識を、やさしい日本語を介し学ぶ。	栗又由利子	武浩美
11	平成27年11月8日 (日) 10:00～12:00	2	きぼう国際外語学院	8人	着付け(浴衣)	着物にまつわる文化的背景や着付けに必要な知識を、やさしい日本語を介し学ぶ。	栗又由利子	
12	平成27年11月14日 (土) 13:00～17:00	4	きぼう国際外語学院	6人	着付け(浴衣)	着物にまつわる文化的背景や着付けに必要な知識を、やさしい日本語を介し学ぶ。	栗又由利子	
13	平成27年10月7日 (水) 18:30～20:30	2	宇都宮東市民活動センター	5人	まちづくり	第1回会議。外国人の地域行事への参画という観点で、告知の日本語を学び、より効果的な告知のあり方を考える。	栗又由利子	
14	平成27年10月14日 (水) 18:30～20:30	2	宇都宮東市民活動センター	5人	まちづくり	第2回会議。外国人への参加を呼びかけている行事の内容を学び、まちづくりにおける外国人の関わり方の現状を知る。	日吉達也	
15	平成27年10月28日 (水) 18:30～20:30	2	宇都宮東市民活動センター	7人	まちづくり	第3回会議。今後働きかけていく機関とその役割を知り、イベントの立ち上げに必要な交渉術を学ぶ。	栗又由利子	
16	平成27年11月1日 (日) 12:00～16:00	4	栃木市	5人	まちづくり	「まちづくり」の視点で歌麿まつりに参加し、外国人の生の声を主催者側に伝える。	栗又由利子	
17	平成27年12月9日 (水) 18:30～20:30	2	宇都宮大学	9人	バスツアー(外国人主導)	外国人側が主催するバス旅行の企画会議。「まちづくり」の授業で知った実際に訪れてみたい土地を各自PRする。	栗又由利子	
18	平成28年2月14日 (日) 9:00～17:00	8	湯西川	15人	バスツアー	バスツアー当日。イベントの主催者として訪問先、参加者、各事業者との間にどのような関わりがあるのかを知る。	栗又由利子	
19	平成27年10月18日 (日) 10:00～12:00	2	きぼう国際外語学院	5人	葬儀	日常生活では使わないが、いざという時にパニックにならないよう葬儀にまつわる言葉を学ぶ。	栗又由利子	
20	平成27年11月15日 (日) 10:00～12:00	2	きぼう国際外語学院	7人	葬儀	死亡から葬儀に至るまでの流れを知り、家族間で普段からどのような相談をすべきかを考える。	日吉達也	高橋孝子
21	平成27年12月13日 (日) 10:00～12:00	2	きぼう国際外語学院	4人	葬儀	葬儀後にどのような手続きが必要かを知り、通夜、葬儀、墓参りにまつわる作法を学ぶ。	栗又由利子	
22	平成27年12月6日 (日) 11:00～15:00	4	学悠館高等学校	95人	防災訓練	避難所生活のシミュレーションを通し、災害時に必要な日本語と知識を学ぶ。	栗又由利子	

(7) 特徴的な活動風景(2～3回分)

活動例①

【第6回 27年6月18日】

白鷗大学未来創造ネットワークと連携し、外国人とのバスツアーを計画した。この回は、第2回目の会議であった。白鷗大学と提携したことにより、第1回目から大学の教室で講座を開催することができた。講座のはじめは、日本語講師と外国人で、これから話し合う中で必要と思われる言葉などについて学習し、その後、大学生とバスツアーで訪れたい場所の選定を行った。大学生がそれぞれ調べてきた地域のプレゼンテーションを行い、それについて外国人が質問するという形をとった。お互いはじめはぎこちなく、コミュニケーションの取り方に困っていたが、外国人が日本語がわかるということがわかると、安心したのか、積極的に話しかけていた。外国人側も、話しかけられれば楽しくなり、積極的に議論していた。

このあと、バスツアーも無事開催できた。大学と提携したことにより、大学のバスを借りることができた。また、集合場所なども大学の敷地内に設定することができた。



活動例②

【第22回 27年12月6日】

栃木県立学悠館高校JRC部と連携し、避難所体験を行った。

この日は、栃木県、茨城県のJRC部員が研修を行っており、その中の一つ「避難所体験」に、「外国人避難者がいたら」という設定で、外国人住民に参加してもらった。

はじめは、別室で避難所での日本語の学習をし、その後、生徒がいる会場で一緒に待機することになった。この時すでに、日本語が話せる外国人には、日本語が話せない外国人役になってもらっていた。外国人に不慣れた高校生は、距離をおき、話しかけることはなかった。

避難所では、避難してきた人が次から次へと押し寄せ、その中に日本語がわからない外国人がいるという設定であった。その他、身体の不自由な人の役を担う高校生もあり、問題を起こす役の高校生もいた。

そういった避難所で、外国人が、「息子が行方不明だ」「気分が悪いので水がほしい」「寒いので毛布があるか」「食べ物はないか」などの質問を、外国語で高校生に話しかけた。高校生は、大半が知らない振りをし、背を向けた。

その中、帰国子女の生徒がおり、生徒はその生徒に任せた。英語ができるからである。しかし、参加者は英語圏の外国人ではないため通じない。しかし、その生徒はなんとかコミュニケーションをとろうと積極的に話しかけていた。

その後、別部屋にて外国人から感想等を聞く時間が設けられた。自分の感じたことを日本語で話すのは非常に大変だったという感想があった。感じたことや、自分の体験談を短い時間にまとめて話すには、日本語力が必要であるが、日常会話ができても、こういった公の場で話すには日本語学習が必要だと感じたようである。こういったイベントに外国人はもっと積極的に参加するべきであるし、最低限の日本語を地域の外国人も学ぶ必要があるということを感じて述べていた。

高校生側にも学びが多く、「外国人、面倒だなと思っている自分がいて反省した」など素直な意見を聞くことができた。「もっと積極的にコミュニケーションをとるべきだと反省した」「英語ができればいいというわけではない」など、在住外国人について学ぶことができたようである。

主催である高校側からも意義のある活動だったというご意見をもらった。今後も続けていきたいが、「外国人と～」では、地域住民も「自分とは関係ない」と思っている人も多く、参加に限られる。地域住民参加のイベントに外国人が地域住民として参加すると、地域の方も地域に外国人が住んでいることも理解できるし、効果があるのではと感想を述べられていた。



(8) 目標の達成状況・成果

評価委員からは、参加者の募集方法や、当日の参加状況についての言及があった。また、講座自体が、「単発式」と「継続式」のどちらがニーズに合うのか検証するべきという意見があった。参加者の数等はとりあえず保たれているが、今後の活動のために、より細かいニーズ分析が必要なのではないかという意見が出た。

成果としては、参加した外国人が概ね満足しており、内容も外国人の希望に近いものになった。日本人とのコラボが多いが、外国人もさることながら、一緒に参加した日本人側にこそ学びがあったのではないと思う。

(9) 今後の改善点について

参加者の募集方法をどのようにするべきか、検討を重ねていきたい。「単発式」の講座と「継続式」の講座のどちらが参加しやすいか、また、キャンセルした場合はなぜキャンセルになったのかを検証し、地域住民のニーズにあった講座が開けるよう外国人住民の声を聞いていきたい。

日本人住民とのコラボは、こういった外国人の事情(想定している人数が集まるか不安、当日のキャンセルなど)を理解してもらい、行わなければならない。イベントの参加の仕方、考え方が国によって違うことや、日本語でどのようにコミュニケーションをとるのかのレクチャー、「やさしい日本語」についても折にふれ、日本人側に伝えていかなければならないだろう。

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

・本事業は、「やさしい日本語」を栃木県内在住の日本人および外国人へと普及することを通して、栃木県内在住の日本人と外国人の相互理解、および、在住外国人の地域社会への参加を支援することを目的としている。

「やさしい日本語」とは、多文化共生社会における地域の共通語であり、また、地域型日本語教室の初級レベルである。在住外国人が地域社会に参加するためには最低限度の日本語力が必要であるが、同時に、日本人側がそれに合わせた日本語を使用するなど、「やさしい日本語」や在住外国人への理解が不可欠である。この「やさしい日本語」を在住外国人および日本人に普及させることは、相互理解、および、在住外国人の地域社会への参加へとつながると考えられる。

このため、在住外国人と関係する各機関、国際交流協会等の団体はもとより、それ以外の関係各団体、企業などとも連携し、外国人の地域社会への参加支援、および、日本人の在住外国人理解を促進させるべく、「やさしい日本語」を普及させ、栃木県内の外国人への日本語教育体制を整備する。

(2) 目的・目標の達成状況

宇都宮市職員、医療ソーシャルワーカー、看護学校学生、日本語教室での取組に参加した日本人へのアンケート調査の結果、「外国人のことがわかった」「直接意見を聞くことができた」など、日本人の外国人理解が深まったと言える。普段、外国人と接する機会のない日本人にとって、話をしたり、直接自分の業務についての意見を聞けることは、またとないチャンスであった。外国人に対する固定概念を払拭するものにもなった。

そういった交流の中で、「やさしい日本語」の有用性を取組に参加した日本人、つまり地域住民が知ることができた。当校で独自に行った日本人へのアンケートでも、日本人も外国人とのコミュニケーションに悩んでいることがわかった。「どうしていいかわからない」「コミュニケーションの取り方がわからない」などである。事前にそう考えていた日本人は、取組に参加した後、なお「やさしい日本語」が有用であると感じていた。「外国人には英語でいいと思っていたが、やさしい日本語が役に立つことがわかった」という意見もあった。こういった講座などを開くことは、「やさしい日本語」の地域への普及の足がかりになると考えられる。

ボランティアとのマッチング事業では、外国人と関係ないと思っている団体が、外国人と自分の団体のつながりについて考えるようになった。会議の中、「今まで考えたことがなかったが、考えてみるとできることがある」という意見も聞かれた。人口減少や、地域活性化と「外国人」をつなげて考える団体もあり、外国人の存在を知り、考えることは、地域コミュニティを考えることにもなる。外国人の存在を社会福祉とつなげて考えることも、社会福祉を担当している部署にとって改めて感じさせる要因になったようである。

その他、ボランティアセンターや、社会福祉協議会、医療ソーシャルワーカー、市職員、看護学校学生および関係者などの一見、外国人と関係ない団体、個人が、この事業に参加することにより日本語教師の存在を知ることになった。日本語教師の持つコミュニケーション力や、外国人知識など、日本語のみならず、それぞれの団体で必要な要素を穴埋めできる人材として認識したと思われる。

さらに、取組全般の講座後のインタビューから外国人は地域で社会貢献できることに満足感を感じていることがわかった。日本人に自身の体験談を話したり、「外国人として」意見を述べられたことに喜びを感じるということであった。「外国人として、話したいこと、伝えたいことはたくさんあるが、どこの誰に話していいかわからず、自分の内にしまっておいた」という意見があった。事業の当初は想定していなかった結果である。日本人向けに開講した講座に、外国人が当事者として参加することは、双方にとって非常に意義があるということがわかった。

その他、ラジオ放送の取り組みでは、不特定多数に在住外国人の存在や、感じていることを発信することが出来た。感想を直接リスナーに聞くことは難しいが、聞いた一部の市民からは、「偶然に聞いたが、面白かった。外国人ってこう感じているのかって勉強になった」という感想があった。レディオベリー広告代理店のアドホリックからの情報では、番組放送時間帯には、18万人がレディオベリーを聞いているという。全員から感想はもらえないが、「聞き流し」の中、外国人の声を聞いたリスナーも多いと思われる。外国人への理解、外国人の話す日本語、そして日本語教師という存在を、広く知らしめることができた。

(3) 地域における事業の効果、成果

取組1では、地域の窓口である市役所職員に「やさしい日本語」を伝えることができた。昨年からの活動をきっかけに、宇都宮市では「外国人への情報提供ガイドライン」が作成された。当初は、市の職員のみでの作成を試みていたが、当事業と連携することにより、外国人、つまり当事者の声が多く掲載され、また、日本語教師が監修するという、他にはないガイドラインが出来上がった。宇都宮市では、「ごみ対策課」が外国人向けにどんなことをするべきか、日本語教師に意見を求めるということも出てきた。「やさしい日本語」の試みが宇都宮市に変化をもたらしたとも言える。

取組2では、ボランティア中間支援施設が参加しているため、今後地域のボランティアへとつながる可能性がある。今回は、実際に地域の外国人とボランティアをつなげるところまでには至らなかったが、ボランティアの窓口であるボランティアセンターが意義を理解し、協力体制がとれたことは、今後の活動にもつながるだろう。

取組3は、地域に住むラジオ放送を聴く18万人の住民に外国人の考えや、声、日本語教師の存在を届けることが出来、「やさしい日本語」とはどんなものか、説明がなくとも実際に日本語教師が使っている日本語を聞くことによって、イメージがしやすくなったと考えられる。「やさしい日本語」や「外国人」とは接点がないと思っている不特定多数の住民に、それらを意識付けできたことは成果だと考える。講座開講では、20～30人にしか伝えられないが、18万人に伝えられるというのは、ラジオ放送だからこそのある。

取組4では、日本人と一緒に講座を開催することが多かった。その際、日本人を集めるために、いろいろな機関に説明に伺った。そういった活動こそが、外国人理解へとつながる。また、外国人は、教室ではない生きた日本語を、日本人と一緒に学べたことは、大きな収穫となった。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果

宇都宮市の国際関係部署である「宇都宮市国際交流プラザ」と連携し、2年連続で「やさしい日本語」講座を開催。公的機関である宇都宮市からの要望によるものである。宇都宮市として、増加傾向にある外国人対応について、方策を考えている。しかしながら、外国人対応等の専門家がいないわけではないため、当事業に興味を持ち、連携することとなった。窓口対応等、職員全体への「外国人理解」や「やさしい日本語」の普及を望んでいるが、講座への希望者は少ない。そのため、強制力を持つ研修として行い参加してもらっている。だが、この強制力の効果により、興味がない職員にも外国人や、やさしい日本語を広げることができている。こういった募集の仕方ができるのも、市役所という公的機関を対象としたものだからだと考えられる。

栃木県医療社会事業協会と連携し、「やさしい日本語」講座を開催することができた。近年、病院で診察を受けるだけでなく、ソーシャルワーカーへの相談（医療費、治療方法、退院後など）する外国人も増えている。通訳がいる場合もあるが、片言の日本語で相談室を訪れる外国人もいる。外国人の中には、見ず知らずの通訳、それもボランティアのような人に自分のプライバシーに関わることは知られたくないと考えている人もいる。同国人だからこそ、また、ボランティアのように日替わりで通訳者が代わる場合、話したくないことを何度も始めから話さなければならないということもある。ボランティアだからこそ、信用できないということもある。そういった外国人が、専門家である日本人のソーシャルワーカーを頼る場合がある。そういったときに、患者の気持ちに寄り添えるよう、外国人の日本語を理解しようとする気持ちや、外国人自体を理解する必要がある。そういった今後の病院や、介護現場の状況を目の当たりにしている栃木県医療社会事業協会の方と、外国人理解、やさしい日本語を広めたいというこの事業がマッチし、連携することとなった。医療現場でも課題になっている、他機関との連携が栃木県医療社会事業協会ではでき、本事業でも多種多様な機関との連携ということがお互い可能となった。

取組2の会議では、外国人と日本人の交差点を生み出すことが可能な機関と連携した。

栃木県国際交流協会（以下、TIA）は、外国人に対する取組の栃木県の中心的存在である。外国人の情報を提供するとともに、外国人への情報も発信している。TIAと連携し、外国人への取組の中心に位置することができたということもできる。

とちぎNPOボランティアセンター（以下、ぽぽら）は、栃木県のボランティア団体の中心である。外国人と日本人との交差点を生み出す、人・場面の情報を持っている。ぽぽらから外国人が関わるイベントや、ヒントになる情報を得ることができた。また、取組4で生まれた「外国にルーツを持つ大学生団体」のサポートもしている。こういった場所があるということは、外国人にとって社会参加につながる第一歩であることは間違いない。また、今まで外国人は対象だと考えていなかったぽぽらをはじめとする各団体が外国人の存在に気づくことができた。

宇都宮市ボランティアセンターまちびあ、栃木市ボランティアセンターからは、中間支援施設としてボランティア等の紹介や、コーディネートをしているが、当時業に関わりを持つことで、見えていなかった外国人と各団体のつながりが見えてきたようであった。理解をした後は、いろいろな外国人とつながることができそうな団体を紹介してもらった。歌麿まつり実行委員会はその紹介団体の中の一つである。実行委員会を紹介してもらい、実行委員として会議に参加した。実際に歌麿まつりにも参加し、外国人が感じたことを実行委員会に伝えた。今後、団体と外国人を、中間支援施設と一緒ににつなげていきたい。

鹿沼市国際交流協会は、川柳作成に全面的に協力してもらった。また、講座から川柳の展示など、独自に発展性を持たせ、地域住民への広報も行った。地域に根付いている国際交流協会と連携することにより、当事業では手が届かない場所への周知、広報ができるという効果があった。

小山市城東地区自治会は、ファッションショーの企画に在住外国人が参加することで、地域に住む外国人の様子がわかったようであった。外国人が住んでいるのは知っていたが、どんな人たちかわからず、声もかけず、距離を置いていたという。この事業をきっかけに在住外国人、近所の外国人の様子がわかり、距離を縮めるという成果があった。

白鷗大学未来創造ネットは、地域の大学内の地域とかかわりを持つという大学生のサークルである。その中には、「国際部」という部署もあり、国際関係に興味がある学生が中心となり、活動している。国際関係に興味がある学生でも、外国人と接触を持ったことのある学生は多くない。外国人と話すことが初めてであったり、地域在住の外国人については、知識がない。そういった学生の団体と連携することは、学生にとって非常に身になり、外国人にとっては、ボランティアなどで接触する日本人ではなく、若い日本人、学生と会話をしたり、一緒に活動することになり、普段知り合えない日本人と接触することになった。参加外国人も、一緒に活動する日本人が学生ということで、地域の若い外国人も参加した。地域で若い日本人と若い外国人が接触することは、本人のみならず、地域にとっても効果があると考えられる。

栃木県立学悠館高校は、県内でも特徴的な高校で、多くの在住外国人子弟を受け入れており、学校職員の外国人理解も進んでいる。また、地域の避難所として、防災に力を入れており、地域と連携した防災訓練も多く実施している。その防災訓練は、当事者と一緒に訓練をするものが多く、今回「外国人」という当事者を行うこととなった。高校生にとっては、教科書で習ったことのない、外国人への対応に非常に困惑していた。その中で、地域の在住外国人への理解、やさしい日本語の有用性を身をもって体験できたことは、地域の防災対策の拠点となる学校の学生、また学生だけではなく教職員へのいい経験になった。

宇都宮市政研究センターには、アンケート作成協力等をしていただいた。研究センターも「やさしい日本語」に注目しており、研究誌にも特集として取り上げている。当事業運営委員が研究員として所属しており、当事業の紹介のみならず、「やさしい日本語」自体を広げるための発信等を各所で行った。センター内はもちろんのこと、市役所の各部署、各自治体において「やさしい日本語」の普及のための呼びかけ、事業説明を行った。その結果、地域で「やさしい日本語」という言葉を知る人が増えてきており、一定の効果が認められる。また、そういった事業説明から、宇都宮市社会福祉協議会との連携につながった。

宇都宮市社会福祉協議会は、市内の福祉を担当する部署であるが、今まで「外国人」を特別取り上げることはなかった。しかし、運営委員がつないでくれたことにより、取組への参加とつながった。当事業ではないが、宇都宮市内に「福祉協力員」という地域の見守りを行っている住民への研修会の講師を担当した。これは、当事業の成果の積み重ねを認めてもらった結果であり、必要性を感じている団体の発掘によるものである。研修は、当事業の目的である地域住民、特に外国人と関係ないと感じている住民への、外国人理解、やさしい日本語の普及の達成に大きな効果があったと思われる。

大学生団体「WBJ」は、取組2のマッチング会議に外国人代表として参加してもらっている。この団体は、取組4の日本語教室に集まったメンバーで立ち上がった団体である。県内の留学生や、外国にルーツを持つ学生が「まちづくり」に興味を持っており、当事業の取組に参加したことがきっかけであった。自分たちの特徴を地域で活かしたいと思っているが、その手段がわからず、思うだけであったが、当事業に参加することにより、仲間がいること、自分たちでもできることがあることがわかり、団体設立となった。しかし、団体の設立の仕方や、運営方法がわからずにいた。しかし、取組2に参加することにより、地域のボランティア団体を支援する人々を知り、手助けをもらうことになった。まちづくりのまとめとして、地域の在住外国人に、バス旅行を企画した。企画をし、翻訳を自分たちの手で行い、募集も行った。自分たちが何か行うだけでなく、取組2に参加した委員からは、団体の活動の可能性についていろいろな意見が出た。今後、取組2に参加している団体と、この学生団体の連携が期待できる。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

参加者への周知は、SNSを活用し、外国人が簡単にアクセスできるようにした。外国人主体のバスツアーでは、自分たちで翻訳し、自分たちで人集めを行うなど、講座受講者自らが、広報を行った。

成果の発信は、避難所体験には地元ケーブルテレビが参加しており、一部地域で放送された。事業の成果は、各ボランティア中間支援施設を通じ、地域に発信していく予定。

鹿沼市国際交流協会が発行している「K.I.F.A.NEWS」では、取組3で行った外国人川柳を、毎月2句ずつ掲載。鹿沼市インターナショナルフェスティバルでは、学習者が自分の川柳を筆で書き、掲示。地域住民の笑顔を誘っていた。その際、ラジオ収録風景や、当事業についても掲示。

その他、日本語教育学会実践フォーラムポスター発表、日本語教育方法研究会でポスター発表（2件）、宇都宮市社会福祉協議会主催福祉協力員研修会での発表、栃木県医療社会事業協会の広報での事業の発信、宇都宮市国際交流プラザ監修の宇都宮市職員向け「外国人への情報提供ガイドライン～「やさしい日本語」と「多言語翻訳」～」内に、当事業での外国人の意見、講師の発言掲載、監修に当事業関係日本語講師2名の氏名掲載、うつのみや市政研究センター研究誌内で当事業について言及されている。

(6) 改善点、今後の課題について

①現状

現状では、まだまだ地域住民の理解が進んでいない。外国人に関係のある個人や団体はすでに独自に様々なイベントや、講座を行っている。しかし、外国人に関係ないと思っている地域住民は多く、在住外国人に気付いていない人も多い。そういった中、外国人が長期滞在者として地域に住むようになり、いろいろな問題が出現してきている。目に見える問題は、日本各地でも取り上げられており、解決方法もわかりやすい。しかしながら、、目に見えない問題や、その地域特定の問題は、解決の手助けをする人も少なく、また、今まで日本語で対処してこなかった外国人が、日本語の壁があり、問題が解決できなくなっている。

②今後の課題

外国人は関係ないと思っている日本人住民への外国人理解は必須であり、受け入れ側に理解がなければ、外国人側が必死に日本語を学習しても意味がない。日本人側の、特に外国人と関係ないと思っている人への「外国人理解」「外国人とのコミュニケーションの仕方」を進めていくことが課題である。

外国人側は、地域共通言語として「やさしい日本語」を最低限マスターし、日本人とのコミュニケーションを諦めることがないよう、日本語の習得を進めていくことが大切である。

③今後の課題解決に向けた活動予定

今後は、まず、外国人に関係ないと思っている住民の中でも、外国人と携わらなければならない分野への働きかけ、また、継続して、外国人と関係がある団体などへ外国人の声を届けるための活動を続けていきたい。

外国人側には、日本語学習の場を提供するだけでなく、日本人との接点を持てる場面の提供も行っていく予定である。その時に必要不可欠なものは、「日本語」であり、日本語学習の必要性を感じてもらえる場作りをしていく。

(7) その他参考資料